

児童生徒が郷土文学教材を学習する意義とは何か

——土佐の郷土文学教材化試論——

武久 康高

一 はじめに

次に引用するのは、四万十川を詠んだ俵万智の短歌である。

四万十に光の粒をまきながら川面をなでる風の手のひら

〔かぜのてのひら〕

明るい日差しが降り注ぐ雄大な四万十川。その川面をなでるように風が吹くと、光の粒がまかれたかのようにきらきらと輝く。そんな四万十川の一瞬を切り取った歌である。本短歌についてはすでに多くの解説が見られるが、ここでは一例として長田真紀の文章を引用しよう。

川は季節によって、その日の天候や時間帯によって、さまざまな相貌をみせる。明澄な水を湛え流れる初夏の四万十川の溪流は、風に吹かれ、川面が陽光の光彩で明るくきらきらと輝く。風の大きな掌によってなでられ撒かれたかのような光の粒沙。視覚的のみならず、自然の生命呼吸を皮膚感覚で表現し、水、風、光のハーモニーと空気を軽妙さと卓越した効果で現

出させている。川の水はとどまることなく流れ、その上を風も静かに次々と吹き去っていく。そこに生じる光もまた、一つとして同じものはないきらめきを瞬間瞬間にみせる。それは人の生が放つ澁刺とした輝きとどこか重なる。

長田によると本短歌は、視覚および「皮膚感覚」を用いた自然美の表現によって、詠歌主体が心揺さぶられた四万十川の美——水、風、光のハーモニーと空気を——を一首中に現出させているという。「視覚的のみならず、自然の生命呼吸を皮膚感覚で表現」することによる瞬間美の現出。これが平易な言葉によってなされている本短歌は、なるほど中学生に触れさせたい教材といえる。

しかし、ある作品を教材とする場合、そこには明確な学習の目標が必要である。同じ作品でもその学習目標の違いによって、教材化の観点や方法、意義は異なると言える。では本短歌を、四万十川を日常的に見ている生徒が「郷土教材」として学習する場合、一体どのような意義が見いだせるのだろうか。本稿ではこの問題について、本短歌、および同じ四万十川を詠んだ大江満雄の詩「四万十川」の分析を通じて明らかにする。さらにそこから、中学生が「郷

土教材」を学ぶ意義の一端を示す。これを本稿の目的としたい。

二 俵万智歌と「日本最後の清流四万十川」言説

Q みなさんが思う高知県高岡郡四万十町のイメージってなんですか???

(質問日時：2012/6/30 06:22:49)

A (前略) 川も市街地を流れる姿は普通の川 最後の清流ってイ

メージではありません 普通の川

(回答日時：2012/6/30 11:56:48)

引用は、ヤフー知恵袋において「四万十川のイメージ」が回答されている箇所である。むしろこの回答者が本心で答えているのかどうか、そもそも四万十川流域の住人なのかどうか、いずれも分からないため、ここではネット上の一意と言わざるをえない。だが、高知に住む稿者の感覚として、同様の感想を持つ幡多地域の人は少なくないように思える。多くの人が毎日目にする市街地(旧中村市など)の四万十川は、おそらく彼らにとっては愛着のある「普通の川」という感覚なのであろう。

当然のことながら、幡多地域の人もこの川が「日本最後の清流」と言われていることは認識している。さらに、そうした外からのイメージのもと、彼らが四万十川を見つめ直すことも多い。例えば香月洋一郎は、四万十川の環境保全活動に関わる旧中村市民への聞き取りを通じて、以下のようにまとめている。

本流にはダムが築かれておらず、コンクリートで長々と固められた河岸もほとんど目にするのではないという「開発からと

残された」川に、めまぐるしく変わっていく社会が逆に意味を発見し、価値を指摘してメッセージをおくったことになる。そのことよって、当の地域が自分達の土地を改めて見つめなおすことになった、そんな図式になるのだろう。

外部の人からの「日本最後の清流」という意味づけを受け、四万十川流域の住民が川を見つめ直し環境保全の活動を進めていく。こうした動きは、現実の四万十川を「日本最後の清流」というイメージのもとに眺め、そこから現実の四万十川をイメージの方へと近づけていくものだとと言える。

だが一方で、人は自己の行為をそれが起こった場所とともに認識し記憶するものである。そのため四万十川流域で暮らす人々は、それぞれ個別の体験に基づく四万十川に対する記憶や思い、イメージを持つていることであろう。マスメディアを通じて流布され共有された「日本最後の清流」というイメージと、個別の体験に基づく四万十川に対する記憶や思い。「郷土教材」として本短歌を扱うにおよび、四万十川流域に暮らす生徒には大きく二種類の四万十川イメージがあることをまずは確認しておきたい。

では、「日本最後の清流四万十川」という共有化されたイメージと本短歌との関係はどのようなものだろうか。例えば俵は平成十年に四万十大使を委嘱されているが、その四万十大使の名刺には美しい四万十川の絵とともに本短歌が載せられている。ちなみに四万十大使設立の趣旨や活動内容は以下のとおりである。

【趣旨・背景】日本最後の清流といわれる四万十川を高知県民・国民の共有財産として位置づけ、全国からの四万十川への支援拡大を一層図るため、全国を舞台に活躍され大きな影響力を持つ著名人に「四万十大使」として就任いただいています。

【大使の活動】大使の活動は、ボランティアを原則としており、大使の方がそれぞれの活動の中で自主的に、例えば、大使の名刺配付、ポスターや新聞広告等への協力、講演会等での全国への支援の呼びかけ、四万十川の情報発信、及び高知県や地元が取り組む四万十川関連行事等へ参加することを期待しています。なお、全国への支援拡大のためのキャンペーンへの協力をお願いする場合があります。

つまり全国の人々に「日本最後の清流四万十川」への支援を呼びかけるにおよび、その象徴として大使の名刺に刻まれた風景こそ、本短歌で詠まれた四万十川の美（「水、風、光のハーモニー」とそこの「空気感」を通じた四万十川の美）なのである。

こうした「日本最後の清流四万十川」の象徴としての本短歌の影響は、次のような高知新聞への投書からも窺うことができる。

（前略）数年前、日本最後の清流・四万十川で命の洗濯をした。さんさんと降り注ぐ陽光下、風光明媚、生き物の躍動を見聞するうちに、倭万智さんの名歌が浮かんだ。「四万十に光の粒をまきながら川面をなでる風の手のひら」。風を擬人化した、こんな金メダル級の叙景歌を募聞にして知らない。彼女が四万十大使に任命され、苦勞して源流点を訪ね吟じた「ここに生まれ海へと育ちゆく水の四万十川という名の旅路」も秀逸。無恥の

私の苦吟は「清流に魚が踊り鳥歌う命みなぎる四万十川は」。／倭さんには、他に「沈下橋沈下してゆくさまを見つ今夜は川に抱かれて眠れ」など吟詠したい秀歌が少なくない。これらの名歌は後世に残す価値があり、観光にも役立つと信ずるが故に、ぜひ、その歌碑や記念館が建立されることを熱望してやまない。

（倭万智さんの歌碑を）兵庫県・79歳）
「日本最後の清流・四万十川で命の洗濯をした」投稿者は、そこで見た四万十の光景に本短歌を重ね合わせる。投稿者はいたく感動し、「これらの名歌は後世に残す価値があり、観光にも役立つと信ずるが故に、ぜひ、その歌碑や記念館が建立されることを熱望してやまない」と投書するのである。「日本最後の清流四万十川」というイメージの構築強化に、本短歌がいかに寄与しているかが窺える文章であろう。

三 「郷土教材」としての倭万智歌

以上のように、共有化された「日本最後の清流」というイメージの構築強化に本短歌は寄与している。こうした外部からの四万十川への見方を地元の人々が受け入れることは、四万十川を見直し、その環境保全活動を活発化させるなどプラスの側面もあった。

だがこれを「郷土」の表象のされ方という観点から捉えてみると、「日本最後の清流」イメージが強力で、かつ環境問題や景観保全のあり方といった「正しい」問いへとつながっていくだけに、四万十川にまつわる他の側面が見えにくくなる（イメージが浮かば

なくなる)という問題も孕む。本来多様であるはずの四万十川へのイメージが、外部からのまなざしを受け入れることにより固定化されてしまう恐れがあるのである。

稿者が考える「郷土教材」として本短歌を学ぶ意義は、本短歌で表象される「日本最後の清流」イメージを理解しつつ、そこからはみ出してしまう個別の体験に基づく「郷土」四万十川に対する記憶や思いを言語化することにある。例えば片岡文雄は、「日本最後の清流四万十川」言説について次のように批判している。

日本最後の清流四万十川のキャンペーンは、大都市生活者の失われた自然を取りもどさせてくれる対象という、一方的な思い入れによってできあがっている。この美しい流域に、ほそほそと生計を立てている住民が、生きるに目処のたつ明日はどのようにしてつかめばよいのかを考えている、そうした姿は視野からは一切脱落したままなのである。／そのような旅にやってくる者の気まぐれではなく、高知県出身の作家や詩人のなかでも(中略)上林暁、笹山久三、大江満雄たちは、四万十を母なる川として生い育ってきたのであり、根拠のない思い入れとはおそ無縁と云っていい。

「高知出身の作家や詩人」根拠のない思い入れとはおそ無縁」という図式は単純すぎると言わざるをえないが、「大都市生活者」の「一方的な思い入れによって」表象されるといふ側面を持つ「郷土」四万十川に対して、その構図を理解しつつ自分にとつての四万十川を言語化すること。またそれを教室で共有することにより、多様な四万十川に触れること。そうすることが外部からの「一

方的な」まなざしを相対化し、「郷土」四万十川への多様な認識を育む一助となるであろう。

しかし実際の授業を考えたとき、本短歌の学習からいきなり個別の四万十川像の言語化を行うのは、いささか性急かもしれない。そこで授業において、本短歌が現出する「日本最後の清流四万十川」イメージへの対抗言説とするべく、次節では幡多出身の大江満雄が書いた詩「四万十川」を取り上げ分析することにした。

四 詩「四万十川」の表現性

四― 美しき「雨の国土佐」のイメージ
まずは大江満雄の「四万十川」を引用する。¹⁰

おもふほど おもふほどに

ふるさとは雨と嵐。

山峡の水もくるふて流れあふれる

豪雨の日。

天のはげしきを

おもふほど おもふほどに

ふるさとの雨の降る日は美し^{かな}。

四万十川の水のごる日はかなし。

冒頭、「おもふほど おもふほどに／ふるさとは」とあるように、本詩は故郷を離れた書き手が「ふるさと」にある「四万十川」を思つて詠んだものである。ここで書き手によって想起される「ふるさと」は「雨と嵐」の風景で表象されている。

まず「雨」について考えてみたい。本詩では「ふるさとの雨の降る日は美し」とあるように、「ふるさと」の「雨」を美しくもかなしいものとして語っている。大江が書いた「郷土記―土佐風土記の断片」によると、大江は故郷土佐を「雨の国」として認識しており、こうした認識は志賀重昂の『日本風景論』の影響を受けているようである。以下、少し長い引用しよう（中略以外、志賀の文章は大江の引用そのまま。ただし新漢字に改めた）。

海の国山の国である土佐は日本一の雨の国といへよう。志賀重昂氏の日本風景論に、快く響く言葉があるから引用してみよう。

「四国の南半（土佐全国、阿波の一部）も、亦た太平洋より吹き来る水蒸気の四国中央の山系に撞撃して凝結することなれば北半（中略）と全然気象を相異にし天候多雨熱帯植物能暢茂し、一般植物も亦た鬱葱す。（中略）四国の南半は日本国中に最も水蒸気多量の処、其の現象は躍如として一景一境に代表せられ、（中略）四万十川（一名渡川）は汪々として湖水の如く、幅或は二十町（二町の誤りか）深さ、時に十尋、中に白渚青嶼ありて煙霧香溟、岸を隔つるの人家隠見出沒の間に在り、想ふ四国の南半益大の処に此の湖様の大江ある。実に所在水蒸気の多量に原因し、所謂、『四万十』条の溪水（造大にもせよ）合流するを以てなり。」

雨の国土佐を語る文として私はいつもこの文を思ひ出す。文章は好きではないが、意味がよいからである。文中の四万十川は少し大袈裟ではあるが、雨の降る日はすさまじい。四万十

川とはアイヌ語で「シ（甚だ）マムタ（美しい）」甚だ美しいといふ意味ださうであるが、あたかも四万十の溪流が合したかのやうな語感をもつてゐる。（私はこの川が懐しく「四万十川」といふ詩を書いた。）

志賀によると「雨の国土佐」は「日本国中に最も水蒸気多量の処」であり、この「現象は」土佐の「一景一境」と言える（例えば、四万十川の「中に白渚青嶼ありて煙霧香溟、岸を隔つるの人家隠見出沒の間に在り」などの風景。また、こうした多量の水蒸気は「四万十」条の溪水が合流した大河・四万十川の存在が原因という。「雨の国土佐」特有の多量の水蒸気に煙る四万十川。ここに大江は「ふるさと」四万十川の美を見ていることが窺えよう。

四―二「美し」が意味するもの

しかし、その「雨」がなぜ「かなし」くもあるのだろうか。この「美し」という用法は、本詩が採録された大江の詩集『日本海流』（一九四三・九）中に五例見ることができ、なかでも本詩の用法と関わりが深そうなのは次の詩である。¹²

富士山をみつめば美し

千年前まで火を噴けど

今は死せり今は死せり

旧噴火口には雪が積り

雲は切切に頂上を覆ふ

今は冬

今は冬

仰ぎみて立去りがたく

わが教師わが本と思ひ

白雪にわれは読みたり

〔歴史〕

書き手は雪が積った富士山の旧噴火口を見つめ、そこから火を噴いていた千年前の様子に思いを馳せる。雪積る現在の富士山（美し）を通して、今は死んでしまった活火山としての富士山（かなし）を見るのである。こうした、ある実景を通じてその歴史に思いを馳せる、その際に用いられる「美し」という用法は、同詩集にある「十国峠」からも窺える。

では、本詩において書き手は、雨降る美しき「ふるさと」四万十川を「おもふ」ことを通じて、どんな歴史に思いを馳せ「かなし」と言っているのだろうか。ここで本詩について書いた大江の文書を引用しよう。¹³

四万十川は、寺田寅彦によると、アイヌ語（「シ」）はなはだ「マムト」美しいで読む方がいいことになる。歴史前にアイヌが住んだということを忘れないほうがいい。十六世紀の一条兼定（ドン・ポーロ）が、キリシタン大名としての夢をもって一条家興亡をかけて四万十川を挟んで長宗我部元親の軍と戦った古戦場だ。二十世紀の初めの、あの「大逆罪人」にされた幸徳秋水も、この川を見ながら育ったのだ。秋水の死刑後、これら（坂本定恵・徳松や上林暁たち）が生れたと思うと、いっそう四万十川にたいする「思い」は深くなる。（中略）少年の日、私は、この川に励まされた。この川は最良の友であり教師なのだと思つた。ずっと、そうだった。この川は「思い」を

せかせる川だ。／渡し舟が転覆して女学生一団の何人かが溺死したとき、早く橋がかかるといいがと思つた。（この事件は中村市の隣の大方町出身の上林暁の小説に出る。私も、その事を思い、いろいろな歴史の流れを思い、「四万十川」という詩を書いた。）／四万十川は、たずねるたびに、ただ「せかせる」だけでなく、歴史を書き換えよう！ 創り変えようとした人びとに寄せる「思い」を新たにしてい、急ぐな」といましめてくださる川だ。／戦国時代のドン・ポーロ兼定は、四万十川の合戦に破れ、伊予の孤島戸島で、日本巡察使ヴァリアーニの「よき知らせ」を期待し、もう一度この川を渡ってキリシタン大名としての夢を実現したかったであろう。／二十世紀の初めの秋水は、ドン・ポーロ兼定の求めたもの、その旗印はちがうが、ともに殉教的なものを感じさせる。

ここで大江は、増水中の四万十川で溺死した女学生一団の「事を思い、いろいろな歴史の流れを思い、『四万十川』という詩を書いた」と本詩創作の背景を述べている。ここでいう「いろいろな歴史の流れ」とは、「シ」（はなはだ）「マムト」（美しい）と四万十川を称えたアイヌの人の運命や栄華を誇った土佐一条家が四万十川の合戦で破れ夢が潰えたこと、「大逆罪人」にされた幸徳秋水の運命、さらには上京後、プロレタリア詩人として活動するも検挙され、最終的に転向することとなった自己の歴史をも思い合わせているのかもしれない。おそらく本詩の「かなし」とは、これら夢を持ちつつも破れてしまった人々・歴史への思いが複合したものと捉えられらる。

だが、本詩を中学生の教材とする場合に留意すべきは、叙上のよ
うな人々や歴史への思いがテキストのみからは読み取れない点であ
る。そこで教材化に際しては、テキスト上に「嵐」「山峡の水もく
るふて流れあふれる／豪雨の日」という言葉があることから、豪雨
に巻き込まれた女学生の悲劇に思いを馳せ、そうしたすべてを飲み
込んでしまう四万十川の歴史的な側面を「かなし」と言っていると
理解しておきたい。

本詩を書くにおよび書き手の脳裏に浮かんでいるのは、「雨の国
土佐」を象徴する煙霧に霞む美しき四万十川だと思われる。しか
し、その雨は嵐へとつながるものでもある。豪雨の日「四万十」
条の溪水」が合流した四万十川は「山峡の水もくるふて流れ」「あ
ふれ」「ふるさと」を破壊する。歴史的に四万十川はそうした狂気
をも孕む川であった。書き手は本詩において、そんな「美し」き
四万十川の姿を想起し、憎らしくもあるが心惹かれる「ふるさと」
四万十川への思いを詠んでいるのである。

五 単元「郷土」「四万十川を描く」の概略

では、以上のような大江満雄の「四万十川」と俵の短歌を用いて
どのような「郷土教材」単元が組めるだろうか。以下、四万十川流
域にある中学校で教えているつもりになって単元の概略を示した
い。

【単元名】

「郷土」四万十川を描く

【対象】

中学三年生

【単元のねらいと単元概略】

俵万智の短歌「四万十に光の粒をまきながら川面をなでる風の手
のひら」は、本校の生徒が毎日のように眺める四万十川について詠
まれた歌である。本短歌は、擬人法を用いた自然美の表現によつ
て、詠歌主体が心揺さぶられた四万十川の美を一首中に現出させて
いる。また一首で用いられている言葉は平易であり、中学生にも理
解しやすい歌となっている。環境教育で四万十川の環境保全活動を
学習した生徒たちにとつて、本短歌で描かれた四万十川の光景は、
その活動のねらいを想起させてくれるものにもなるだろう。

だが本単元のねらいは、俵が描き出す四万十川の美を理解し共感
するのみに止まらない。本短歌の理解を経て生徒に気づかせたいの
は、本短歌と「日本最後の清流」イメージとの近似性、およびその
イメージが外部の人々から表象され、また観光客誘致などのために
地元から発信される「郷土」の姿だということである。四万十川流
域で暮らす生徒たちには本単元を通じて、こうした「郷土」の表象
のされ方とそこにある思い（あるいは思惑）を理解し、その一方
で、共有化された「四万十川」イメージとは異なる自己にとつての
四万十川を言語化し共有する、そのことで一面的でない多様な「郷
土」「四万十川像」に触れて欲しいと考える。

では、自分の体験や思いに基づく四万十川の言語化とは、例えば
どのようなことなのであろうか。そこで本単元では、次に高知県出
身の詩人・大江満雄の「四万十川」を取り上げ、そこで語られる

四万十川の表情と「ふるさと」四万十川への思いを理解させたい。

「ふるさと」四万十川を描くにおよび、大江満雄は豪雨で荒れ狂う姿を取り上げる。四万十川は、たくさんの夢を抱えた女学生の一団をはじめ、今まで数多くの人を飲み込んできた悲しき川である。だが一方で、そんな「嵐」を引き起こす原因ともなる「雨」に震む四万十川は「おもふほど おもふほどに」美しい川でもある。本詩では、「ふるさと」に対する大江の愛憎相半ばする思いが四万十川に象徴され表現されていると考えられる。そこで授業では、特に「美し」という表現に注目することで書き手の思いに迫らせてたい。

単元のまとめとして行う表現活動では、俵やマスコミによって描かれる四万十川、大江が描き出した四万十川、それぞれの姿とその表象にこめられている思い（思惑）を想起し意見を言わせた上で、自分にとっての四万十川を「四万十川リーフレット」としてまとめ、クラスで共有する。この活動を通じて生徒には、一元的でない「郷土」表象の多様性を実感させたい。

六 おわりに

教科書教材ではなく「郷土教材」を扱う積極的な意味はあるのだろうか。しばしば『郷土教材』は生徒に身近なものであるため興味関心を持つ」と言われるが、これって本当なのだろうか。こうした素朴な疑問が本稿を考えるに至ったきっかけである。この問いに対する明確な答えはまだ出ていないが、四万十川が描かれた郷土文学作品の分析を踏まえ、本稿では以下のことを提案したい。

まず、今回扱う「郷土教材」は「郷土」が描かれた教材¹⁵に限定し、そのメリットを、描かれた対象（「郷土」の風景など）について生徒たちが直接見聞きできるところと考える。授業では、

- ① 「郷土」がどのような立場から、いかに語られているか、
- ② そこからどんな思い（思惑）が読み取れるか、
- ③ ①②の「郷土」の語られ方や思い（思惑）についてどう思うか、

④ 自分だったら「郷土」の何をどう表現するか、
といった問いを発することにより、「郷土」の表象に関わる問題を考えてり（自分やクラスメートの「郷土」への見方と比較することで作者の見方を相対化する）、「郷土」そのもの、あるいは「郷土」と自己との関係性を見つめ直すきっかけにすること（「郷土」に対するものの見方を広げ、深める）を目的とする。これが本稿で提案したい「郷土教材」学習の意義である。

もちろん、これ以外にも「郷土教材」を学習する意義はあろう。今後は、本稿で提案した単元を四万十川流域の中学校で実践し、そこでの生徒たちの反応や現場の先生方のご指導を踏まえた上で、「郷土教材」学習の意義について改めて考えてみたい。

※本研究は、平成24年度特別研究経費「土佐さきがけ教員養成プランの推進―次世代の子どもたちを育てる教員の養成―」（国立大学法人高知大学）における事業「土佐文化に関する学習材の開発と教員の教育力の育成」（代表…武久康高）の一環である。

注

- 1 引用は、俵万智『かぜのてのひら』（河出書房新社、一九九二）による。
- 2 最近のものだと、横山未来子「現代の歌枕37万十」（『短歌研究』二〇一一年・八）などがある。
- 3 『黄金の言葉と歌篇』勉誠出版、二〇一〇。
- 4 http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1189939301 2012.11.11 閲覧。
- 5 香月洋一郎「清流 四万十川の問いかけ―旅人を癒すためでない―」（『紫明』29、二〇一一年・一〇）。香月が紹介する、旧中村市に住む四万十川の環境保全活動に関わっている人の話によると、「NHKの特番で」「最後の清流」と紹介されてから、まわりからの眼がすっかり変わり、四万十川が「環境問題、景観保全問題のトップランナーとして走るようになった」。そんななかで「戸惑いながら、考えながらやってきたところがあるんです」という。
- 6 高知県林業振興・環境部／環境共生課のホームページ
(http://www.pref.kochi.lg.jp/~shimanto/4torikumi/shimanto_faishi.html 2012.11.9 閲覧)
- 7 注6と同。
- 8 高知新聞投書欄「きょうの声ひろば」二〇一二年・一〇・一一。
- 9 片岡文雄「作品解説」『ふるさと文学館第四五巻 高知』ぎょうせい、一九九三。
- 10 引用は、伊藤新吉・小田切秀夫監修『大江満雄集 詩と評論

◇詩』（思想の科学社、一九九六）による。初出は『蠟人形』（一九四二・七）。

11 大江満雄「郷土記―土佐風土記の断片」（『新文化』一五八号、一九四四・三）。

12 注10書より引用。

13 大江満雄「私の詩について（二）」（伊藤新吉・小田切秀夫監修『大江満雄集 詩と評論』思想の科学社、一九九六）。初出は『事実と創造』一九八二・一〇。

14 他所でも大江は、女学生の悲劇を「四万十川」発想の背景と述べている。片岡文雄「土佐三代人と風土」¹¹⁶「昭和の詩人たち」（『高知新聞』一九六八・四・二七）を引用する。

大江満雄は、ふるさとを脱出する以前は中村の町に出ていた。その当時は、まだ今日のような立派な鉄橋はかかってはいなかった。そこで人々は小舟で中村の町と対岸具間の間行き来していた。中村実科女学校の女生徒たちが、増水中の四万十の流れを小舟で渡る途中、その小舟が転覆して溺れ死んだのは、この頃であった。／詩「四万十川」が発想されたについては、そうした哀話が背景になっていることを、大江満雄は私にさりげなく語ってくれた。詩人のふるさとにつながる心情というものは、おもえば『かなしい』ものである。

15 郷土出身の作家の作品も「郷土教材」と言えるが、今回の考察からは除外している。この点については改めて論じる。

（高知大学）